

農業進化の「二つの道」について

——「二つの道」理論の段階論的検討——

浅田 喬 二

一 は し が き

「二つの道」理論は、わが国の農地改革実施過程において、さらに、農地改革の終了した段階において、現代的適用の問題はめぐって論議されたのである。一方の論者は、日本農業の資本主義的進化を何らかのかたちで確認し、農業発展の方向は、「農民的農業革命」の道による「アメリカ型」発展の方向と、「地主的農業改革」による「プロシア型」発展の方向とが客観的に可能である、と主張し、わが国の農地改革は後者の道である、と結論した。他方の論者は、「二つの道」理論の適用可能な客観的条件は、日本農業のなかに、ブルジョアの進化の「二

《ノート》 農業進化の「二つの道」について

つの道」が、現実に行進していたということであるが、この経済的・客観的事実は確認できない、したがって、「二つの道」理論は日本農業に、単純には適用できない、と主張したのである。これらの「二つの道」理論の日本農業への適用の是非をめぐる論者の主張の根拠は、多種多様であった。⁽¹⁾そして、この「二つの道」理論の適用をめぐる論争は、「講座派」的農業理論の全面的・体系的検討にまで発展したのである。⁽²⁾

これらの両方の論者に対していえることは、「二つの道」理論の一般的規定及び「二つの道」理論の歴史的な発展段階論的規定を媒介にした、現代的適用がなされていなかった、ということである。つまり、「二つの道」理論の無規定的・無限定的適用、発展段階論的規定ぬきの、無媒介的適用が行なわれていたのである。

最近においては、「二つの道」理論の適用をめぐる論争はイギリス経済史の分野で行なわれつつある。この論争は堀江英一編『イギリス革命の研究——その農業変革を中心として——』（昭和三七年）の公刊を直接的な契機として行なわれつつあるものである。⁽³⁾

堀江氏らの見解は、イギリス市民革命における土地変革は「伝統的見解」＝「講座派理論や大塚史学」とはちがって、領主的な「プロシア型」の土地変革が、農民的な「アメリカ型」

の土地変革に勝利し、その後の農業発展は資本主義の三分割制に帰結する、という点にある。これに対する批判は、イギリスの農業変革は「アメリカ型」の道である、という通説的立場から行なわれている。

これらの論争は、農地改革時の「二つの道」理論のそれとは異なり、極めて部分的ではあるが、「二つの道」理論の提起された歴史的、経済的發展段階を背景に行われている点は、ある程度前進的である、といえるのである。しかし、これらの論争は、「二つの道」理論提唱者の見解に密着して議論が行なわれていない。したがって「二つの道」理論の恣意的解釈が行なわれているようである。

ところで、この小稿では「二つの道」理論提唱者の見解に密着して、それが提起された歴史的・経済的背景をふまえて、この理論の一般的規定を行ない、さらに、帝国主義段階において「二つの道」理論を適用する場合に、どのような媒介環が必要であるかを、いいかえれば、この理論の普遍性と限界性について検討することが、直接的な課題である。⁴⁾

注(1) 論争の内容については、さしあたって、菅間正朝

『日本農業革命の二つの道』第一章(昭和二十三年)、鈴木鴻一郎『日本農業と農業理論』第一篇(昭和二十六年)、内田穰吉・古畑義和『戦後日本の政治と経済』、

一三四～一四六頁(昭和三〇年)、神山茂夫『戦後における日本の農業問題』第三・四章(昭和三〇年)、山田勝次郎・井上晴丸・井野隆一『農民収奪と農業危機』、一四七～一六〇頁(『日本資本主義講座』第六卷、昭和二十九年)、上原信博『土地国有論』と『二つの道』の論理、二八九～二九三頁)山田盛太郎編『変革期における地代範疇』昭和三十一年)参照。

(2) この論争の経過については、小山弘健編『日本資本主義論争史』(下)、九一～一二〇頁(昭和二十八年)参照。

(3) この著書に対する批判は、毛利健三「堀江英一編著『イギリス革命の研究』の方法をめぐって——『二つの道』理論適用の問題——」(歴史学研究会『歴史学研究』第二七五号、昭和三八年四月)の論稿で行なわれ、これに対する反批判は、前掲著書の執筆者の一人である尾崎芳治氏によって、「レーニンの『二つの道』理論とイギリス革命の土地変革」(土地制度史学会『土地制度史学』第二二号、昭和三九年一月)と題して行なわれた。

(4) 最近の東ドイツにおける「二つの道」理論に関する論争については、簡単なものではあるが、鈴木圭介『農業における資本主義発達の二つの道——『アメリカ型』と『プロシヤ型』——』、三一七～三二〇頁(大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄編著『西洋経済史講座』

二 「二つの道」理論の一般的規定

「二つの道」理論は、(一)土地変革の二つの路線と、(二)農業ブルジョア化の二つの類型とを総括した理論であり、(三)これらの土地変革と農業資本主義化との、それぞれの二つ道は、当時におけるロシアの農村・農業の経済的・客観的傾向に対応する理論である、ということができる。

まず、レーニンの主張から検討することにする。

土地変革の二つの道とは、ロシアにおける農奴制的残存物のもつとも顕著な体現物であり、そのもつとも強固な支柱であった地主的巨大土地所有の変革をめぐって、いかなる階級が、いかなる方法によって、この土地所有を取り除くかをめぐる、二つの対立的な路線である。そして、この農奴制的残存物の廃絶が、第一次ロシア革命における農民の土地闘争の核心だったのである。かくして、土地変革の二つの道とは、農奴制的巨大土地所有の、なしくずしの改良の道と(「ロシア型」の道)、徹底的な廃棄の道(「アメリカ型」の道)との、対立する路線である。農業のブルジョアの進化のための農奴制的巨大土地所有の、改良の道が、地主的土地変革・「地主的土地清掃」(『レーニン全集』第一三卷、二七四頁、大月書店版、邦訳頁数、以

下『全集』13、二七四頁と略記する)であり、徹底的な廃棄の道が、「農民的土地変革」(『全集』13、二五六頁)、「農民的土地清掃」(同上、二七四頁)なのである。「農奴制的残存物は、地主経営の改造という道によっても、また、地主的巨大土地所有の廃止という道によっても――すなわち、改良の道によっても、革命の道によっても、消滅しうる。」(『全集』13、二三四頁)。

農業のブルジョアの進化の二つの道とは、「アメリカ型」の土地変革とくびすを接して、一切の半農奴制的諸関係から解放された小農民経営が、ブルジョアの農業企業家に成長転化する道と、「ロシア型」の土地変革との内的関連のもとに、地主経営が半農奴制的収奪方法を、資本主義的収奪方法に、しだいに置きかえることによって、ブルジョアの・ニンケルの経営に成長転化する道とである。つまり、農民層の急速な分解と生産力の急速な発展を経済的基盤とした、農業経営の急速な進化が、「農民型のブルジョアの進化」(『全集』13、二三九頁)・「農民的資本主義」(同上、四六九頁)の道であり、資本主義の方向へむかっている地主経営の漸次的進化が、「地主型のブルジョアの進化」(同上、二三九頁)・「地主的資本主義」(同上、四六九頁)の道である。このように「アメリカ型」の土地変革を起点として、農業ブルジョア化の「アメリカ型」が発展し、

「プロシア型」の土地変革が出発点となって、農業資本主義化の「プロシア型」が進行するのである。

レーニンは、この土地変革の型と農業進化の型とを明確に區別して、「二つの道」理論を定式化していないが、この理論を全体的に把握しようとするならば、土地変革の型と農業進化の型との区別及び内的連続性を、統一的に把握しなくてはならぬであろう。レーニンが「二つの道」をのべる場合には、土地変革の型と農業進化の型を、一括してのべているのである。

このような内容の「二つの道」理論が定立された経済的・客観的基礎は、ロシアのすべての地方の農村で、地主経営のブルジョアの進化も、農民経営のブルジョアの進化も、ともに行なわれていたことであり、さらに、このようなロシアにおける農業ブルジョア化の二つの流れを基軸として、地主の利害と農民の利害の対立・闘争が行なわれていたことである（『全集』⁽²⁾ 四、二三七頁、四、一四五頁）。つまり、土地変革の二つの道、農業進化の二つの道の対立・闘争は、ロシアの農村で現実存在したものであり、「二つの道」理論は、これらの事実を現実的・客観的根拠として定立されたものである、ということが出来る。このように「二つの道」理論は、ロシアの農村で現実に進展しつつある社会経済的事実を照応する、理論である。……発展しつつあるブルジョアのロシアでの農業問題「解決」の二つの

方法は、農業における資本主義の発展の二つの道に照応している（『全集』⁽²⁾ 四、二二二―二二三頁）。

以上のような、レーニンの「二つの道」に関連する叙述をふまえて、古典的なブルジョア革命の段階における、「二つの道」理論の一般的規定を行なうと、つぎのようにいえるであろう

「二つの道」理論は、農業のブルジョアの進化の二つの道を内包している、と同時に、これと内的関連をもつものとして、ブルジョア革命時における土地変革の二つの道をも内包するものである、ということが出来るであろう。いいかえれば、「二つの道」理論は、ブルジョア革命時における土地変革の二つの路線と、ブルジョアの農業進化の二つの類型との、両方をその内容とする理論である、ということが出来る。しかし、問題は、土地変革の二つの道と、農業資本主義化の二つの形態とを、どのような内的関連をもつものとして把握すべきか、ということである。土地変革の二つの路線は、その後の農業ブルジョア化の二つの類型を規定する前提であり、基礎過程である、ということが出来る。つまり、「アメリカ型」の土地変革が起点となって、農業ブルジョア化の「アメリカ型」の道が進展し、「プロシア型」の土地変革が出発点となって、農業資本主義化の「プロシア型」の道が進行する。かくして、「二つの道」理論の基本的内容は、土地変革の「革命」的か、「改良」的かにあ

るのであって、農業ブルジョア化の「アメリカ型」か、「プロシア型」かにあるのではない。農業改革の全過程は、土地改革（前段）と農業構造の改革（後段）とを包括する過程であるが、農業構造改革の型を決定する条件は、土地改革の型のなかにひそめられているのである。「二つの道」理論の本質は、農業の資本主義的進化的類型を基本的に規定する土地改革のありかたにあるのであって、その後の農業ブルジョア化の形態は、土地改革の類型によって基本的に規定されるのである。

以上のような「二つの道」理論の理解にたつたらば、この理論の土地改革的側面と農業構造改革の側面との区別及び関連、特に土地改革の側面を軽視しないし無視する、つぎのような理解は正しくないであろう。「……『アメリカ型の道』とは、家父長的農民がブルジョワ的農業企業家に成長することであり、それは、自由な土地で自由な農業企業家によって自由な経営が行われ、資本主義を急速に発展させる点に特徴をもつ……『プロシヤ型の道』とは、農奴制地主経営が徐々にブルジョワ的エンカールの経営に成長転化する点であり、それは、中世的な土地所有関係がいきよに清算されないで、徐々に資本主義に適応していき、そのために資本主義は長いあいだ半封建的な性格を保持する点に特徴をもっている……」⁽³⁾

「『アメリカ型の道』の本質は、農民層の両極分解の開放的

展開を基軸とする資本主義発達にある。そしてかかる発展の「型」を保障し促進するブルジョアの改革こそ『アメリカ型』土地改革とよばれるにふさわしい」。また、「二つの道」理論を階級闘争一元論に単純化する、つぎの見解も正しくない。「資本主義下の農業の土地所有制度と経営方法とが階級闘争を通じて創出されるとしても、そのときどきの、農業内部の階級闘争……が地主側の、あるいは農民側のいずれの（の）勝利に終るかによって農業における資本主義の発展の型が決定される、すなわちプロシア型かアメリカ型になる……」レーニンの主張の實質的内容は、地主と農民とがそれぞれ、客観的には、農業の資本主義的發展を志向しつつ階級闘争をおこない、この闘争の結着によって種々の土地制度と農業経営が生じ、そのおのおので資本主義的農業が展開する、ということにつぎる⁽⁵⁾。さらに、土地改革の二つの道と、農業進化的二つの道との結合関係を否定する見解がある。堀江英一氏は、土地改革の「アメリカ型」が農業発展の三分割制に、土地改革の「プロシア型」が農業発展の「プロシア型」に直結する内的必然性はどこにも存在しない、といつて、「……領主的なプロシヤ型の土地改革がエンカール体制と直結し三分制度と結合しないという保証はどこにもない」⁽⁶⁾、とのべられているが、このような見解は「二つの道」理論の土地改革的側面と

農業進化的側面の内的結合を、機械的に分離している点で正しくない。

注(1) 「ロシア革命のこの経済的基礎のうえでは、客観的には、この革命の発展と結末の二つの基本線がある。

一つは幾千もの糸で農奴制度とむすびつけられた古い地主経営が存続しながら、徐々に、純資本主義的な「ユンカー」的経営に転化していく、という線である。雇役から資本主義への終局的移行の基礎となるものは、農奴制的地主経営の内部的な改造である。国家の農業構造全体は資本主義的となりはするが、農奴制の特徴を長いあいだ保存する。もう一つは、革命が古い地主経営を粉砕し、農奴制度のあらゆる遺物を、なによりも大土地所有を破壊する、という線である。雇役から資本主義への終局的移行の基礎となるものは、農民のために地主の土地が収奪されたおかげで巨大な剝奪をうけた小農経営の、自由な発展である。農業構造全体は資本主義的となる。なせなら、農奴制度の名残りがより完全に絶滅されればされるほど、農民層の分解はますます急速にすすむからである。いいかえれば、一つは、地主的土地所有の大部分と古い「上部構造」の主要な基柱とが保存される線である。……もう一つは、地主的土地所有とそれと

照応する古い「上部構造」のすべての主要な基礎とを破壊する線である。」(『全集』③、一〇一—一頁)、なお『全集』④、二三四—二三五頁、⑤、二二二—二二三頁参照。

しかし、レーニンは極めて部分的ではあるか、地主的土地所有の農民的消滅、「アメリカ型」土地変革は、「アメリカ型」農業進化的「経済的基礎」であり、地主的土地所有の地主的消滅、「ロシア型」土地変革は、「ロシア型」農業進化的「経済的基礎」である、とのへ、土地変革が農業進化的に對してもつ内的現定性を強調しているところもある。例えば『全集』第一六卷では、「土地の国有化」古い土地所有の農民的破壊は、アメリカ(的)な道の経済的基礎である。一九〇六年一月九日の法律「古い土地所有の地主的破壊は、ロシア的な道の経済的基礎である。」(一二五頁)と。なお、『全集』④、二七四—二七五頁参照。

(2) この際もつとも困難な問題は、「……ブルジョア社会とブルジョアの進化的土塊のうえでの、二つの階級の闘争の基礎について、完全な理解をすることにがある。この闘争を資本主義的ロシアの経済的発展の客観的傾向に還元しなければ、この闘争を合法的な社会現象として理解することはできない。」(『全集』④、二四三頁)。

(3) 大谷瑞厚「いわゆる農業の近代的進化をめぐって——『二つの道の理論』に対する疑問——」六一—六

(二頁) (玉城肇・末永茂喜・鈴木鴻一郎編『マルクス経済学体系』、下巻、昭和三二年)。

(4) 前掲、毛利論稿、四二頁。

(5) 渡辺寛『レーニンの農業理論』、一四五～一四七頁 (昭和三八年)。

(6) 前掲、堀江編著書、三九頁。

(7) 以上のような「二つの道」理論の一般的规定にたつならば、古典的なブルジョア革命の段階において、封建的土地所有関係と階級秩序の変革を直接の課題とするブルジョア革命は、その革命陣営内に、この変革の仕方をめぐって内的対立が生じる。つまり、封建的諸関係の徹底的廃絶と妥協的改良の道とか。このブルジョア陣営内部における対立・闘争は、イギリス市民革命の場合にはレヴェラーズと議会派(独立派、長老派)との間に、フランス革命の時にはジャコバン派とジョンド派との間に、みることが出来る。前掲、堀江編著書、一二～一五頁、第四章、『全集』(9)、四八～四九頁、堀江英一・池田誠・尾崎芳治『市民革命の理論』、六九～九八頁(昭和三二年)参照。

三 帝國主義段階における「二つの道」理論

ロシアにおける半農奴制的土地所有の徹底的廃棄、農民的土

地変革による地主的土地所有の根絶は、「農民的土地国有化」

(『全集』四、九四頁) によってのみ実現されるものである。

つまり、農業のブルジョアの進化のための農民的土地清掃は、土地国有化である。土地国有化は私的⁽¹⁾土地所有の完全な廃止、農業における半農奴制的諸関係を完全に清掃する唯一の方法であるばかりでなく、「資本主義のもとで考えられる最良の土地整理方法である」(『全集』四、三八八頁)。土地国有化の経済的意義は、差額地代の所有者を地主から國家へ変化させ、絶対地代の存在そのものを否定することにある⁽²⁾。このような土地国有化は、農業資本主義の広汎で急速な発展を保障するものである。

土地国有化は、土地所有の主体となる國家形態の問題にかかわってくる。農民的土地変革という経済的変革は、当然のこととはいえ、政治的上部構造の変革を前提とするものである。根本的な土地変革は根本的な政治変革なしには不可能である。つまり、地主的専制の國家機構を廃止せずしては、地主の土地を全面的に没収することはできない。「農民は、旧権力と常備軍と官僚制度を除去することなしには、土地変革を実現することはできない。なぜなら、これらはすべて、地主的土地所有のものとも信賴できる支柱であって、数千本の糸で地主的土地所有と結びついているものだからである」(『全集』四、三五四頁)。かくして、土地変革の二つの類型は、國家機構、政治形態の二

つの類型と対応する。つまり、地主的土地所有の改造の道である「ロシア型」土地変革の道は、国家形態では「地主的君主制」（『全集』巻、一六〇頁）、「エンケルの君主制」（『全集』巻、四〇〇頁）の道であり、地主的土地所有の根絶の道である「アメリカ型」土地変革は「民主的共和制」（『全集』(9)、一〇六頁）、「農民的なブルジョア民主的共和制」（『全集』巻、四〇〇頁）樹立の道である。

土地変革の「アメリカ型」、ブルジョア民主主義的國家機構樹立の推進力となるのは、プロレタリアートと農民とである。当時におけるロシアのブルジョアジーは民主主義革命を徹底化する役割を果たさなくなっていた。というのは、ブルジョアジーの背後には、プロレタリアートの脅威が存在するので、ブルジョアジーは半封建的諸關係を廃絶するよりは、これを最大限に利用するほうが、自己の階級的安体を計るうえで有利だからである。

小生産者たる農民は貨幣経済の渦中にまきこまれると、農民の階層・階級分解が生じ、農民の統一・集中とは反対に分裂を惹起せしめる。このことは、農民がこの革命の指導力にならない有力な根拠である。しかし、小ブルジョアジーたる農民は、半封建的所有關係が支配的な条件のもとでは、ブルジョア的な私的所有一般を無条件に擁護するよりは、所有の主要形態

の一つである半封建的地主的土地所有を廃絶して、土地を農民へ分割するほうが、農民の生活・生産条件を改善するには有利である、と考える。ここに、当時のロシアにおけるブルジョア革命の指導者であるプロレタリアートが、農民と階級的に同盟しうる社会経済的基盤があるのである。いいかえれば、ここに「農民的ブルジョア革命」（『全集』巻、三五九頁）勝利の基本的な階級的條件としての、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」（『全集』(9)、九二・九三頁）というスロガン⁽⁶⁾の提出される社会経済的根拠が存在するのである。

一九一七年の二月革命によってツァーリ君主制は打倒され、新しい政治権力の座についたのは、資本主義的地主とブルジョアの二階級の代表者であった。このように政治権力がブルジョア階級の手中に掌握されたという限りでは、二月革命はブルジョア革命であった、ということができる。しかし、ツァーリ君主制は撃破されたが、根絶されたわけではなかった。つまり、「新政府は、ツァーリ君主制を打ちのめしてしまわないうちに、はやくも地主ロマンノフ家の王朝との取引をはじめた。オクチャプリスト⁽⁷⁾カデット型のブルジョアジーは、勤労者に対抗して資本の特権をまもるために、官僚と軍部との首長としての君主制を必要とするのである。」（『全集』(9)、三三五頁）。

この時期には、ただブルジョア地主と資本家階級の代表者だ

けが政治権力を握っていたのではなく、これと並んで、「補足的、副次的な政府」（『全集』24、四三頁）としての、労働者・兵士代表ソヴェトが存在した。レーニンは、このような極めて特異な権力構成を「二重権力」とよんだのである。⁽⁶⁾この労働者・兵士代表ソヴェトは「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」を実現したものであるが、この独裁政権は自発的に、その権力をブルジョアジーに移譲し、自発的にブルジョアジーの付属物となった。したがって、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」は、「すぐまぎわまで到達した」（『全集』24、四三頁）であり、「ある形態で、またある程度まで」（同上、二八頁）しか実現されなかった。このように、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」が全面的に実現されなかったことにより、土地変革の「アメリカ型」・土地国有化は、当然のことながら実現されなかった。

ロシアにおける地主的土地所有の存在は、君主制復活の可能性を保障するものであるから、土地国有化によってこの可能性をたちきることが必要となる。しかし、当時の地主的土地所有は、無数の糸によってブルジョアジーと緊密に融合していたのであるから、全人民による銀行の統制、シンジケートの国有化等の、資本の徹底した抑制策なしには、土地所有を無償で廃止することは困難であった。したがって、土地国有化は資本抑制

の一連の方策なしには、実現不可能であった。⁽⁷⁾そこで、二月革命後の土地国有化は、たんに、ブルジョア革命の「最後の言葉」であるだけでなく、「社会主義への一歩でもある」（『全集』23、四四二頁）、というように、ブルジョア革命の評価を受けるだけでなく、プロレタリア革命の序曲としての意味をももちうるのである。つまり、土地国有化は、「社会主義への過渡的方策」（『全集』26、一六七頁）の一つである、という新しい評価を受けることになる。

ロシアにおける地主的土地所有は、君主制復活の可能性を保障するものであったから、この地主的土地所有の否定をなしえなかった十月革命前までは、ロシアの君主制復活の企図は根絶されていなかった、といえるであろう。したがって、土地国有化は、銀行の国有化、労働者統制の実施、シンジケートの国有化等と共に、プロレタリア革命の実現すべき目標としてかけられていたのである。⁽⁸⁾

一九一七年の十月革命は、周知のように社会主義革命ではあるが、この革命の勝利は、君主制と地主的土地所有とを最後のに、完全に廃止した。かかる意味において、十月革命はブルジョア革命の課題をも、最後まで遂行した、ということができなくして、プロレタリア独裁がロシアで実現したすべての土地の国有化は、ブルジョア民主主義革命を最後まで遂行すること

を、保障したものであり、さらに、すべての地主所有地の無償廃止、土地国有化は農業の社会主義的改造のための最大の機会を、プロレタリア国家にあたえたのである（『全集』⁽⁸⁾、三三六頁）。いいかえれば、十月社会主義革命は土地国有化をふくむ、ブルジョア民主主義的課題を、「プロレタリア革命的な、社会主義的な活動の『副産物』として、通りすがりに、このついでに、解決してしまった」（『全集』⁽⁹⁾、四〇頁）のである。

渡辺寛氏は前掲著書で（一六九、一七二、一七八頁）、民主主義革命の主要な課題（民主共和制、全地主地の没収、八時間労働制の実施）が全面的に解決されなければ、ブルジョア民主主義革命は「終了」とはいえないのではないかと考えて、ロシアの二月革命＝ブルジョア民主主義革命論に疑問を提出しているが、これはレーニンの恣意的解釈にもとづく誤謬である。というのは、レーニンは国家権力が一つの階級から他の階級へ移ることこそが、「革命の第一の、主要な、基本的な標識である」（『全集』⁽⁴⁾、二七頁）、と規定し、ロシアの二月革命は国家権力が、「農奴的・貴族的地主階級」（上同）からブルジョア階級に移った、とのべ、「このかぎり」（上同、二四、四〇頁、同氏もこの箇所は引用している）との限定つきで、二月革命＝ブルジョア民主主義革

命は「終了」（上同）した、とべているからである。つまり、レーニンはあくまでも、国家権力の移動を革命の基本的な指標として、二月革命をブルジョア革命と規定したのである。このことは、いうまでもなく、二月革命がブルジョア民主主義的課題を全面的に実現したことを、意味するものではない。したがって、二月革命後においては、実現されなかったブルジョア民主主義的課題は革命の主要課題としては存続しないが、副次的課題としては存続する（主要課題はプロレタリア革命的課題である）。このような副次的課題は、前述のように、十月社会主義革命によって、通りすがりに、このついでに解決されたのである。ここに、二月革命の中途半端性と十月革命の徹底性とが、看取できるのである。

以上ロシアにおける土地変革と政治変革との関連、土地国有化と政治形態との結合関係、二月革命とブルジョア民主主義的課題解決との関係等について検討したのであるが、これらのことを、帝国主義段階における「二つの道」理論として要約してみる。

レーニンが「二つの道」を類型化して、当面するロシア革命の階級配置を行なった時期は、世界的には、まさに、帝国主義段階であった。帝国主義段階において、ブルジョア民主主義革命が主要な課題として存続している国では、土地変革の「ア

「メリカ型」を推進する指導力は、ブルジョアジーではなく、プロレタリアートである。帝国主義段階のブルジョア革命におけるプロレタリアートの任務は、プロレタリアートのヘゲモニーのもとに、プロレタリアートと農民が同盟し、自由主義的大ブルジョアジーを中立化して、半封建的諸関係を廃棄することである。このような「人民革命」（『全集』(9)、七、一〇五頁）における土地変革の路線こそが、帝国主義段階における「アメリカ型」の道、農民的土地変革の道である。

このような帝国主義段階における「アメリカ型」土地変革のあとに続く農業進化の形態は、「アメリカ型」の農業資本主義の道である。この「アメリカ型」土地変革によってつくりだされた小経営の自由な発展が、資本主義的農業制度を形成するのである。小農民経営の自由な競争のもとでは、生産力の急速な発展が進行し、農民は私的土所有と商品生産という環境のもとで、可能なかぎりの生活・生産条件の有利性を取得するのである（『全集』(9)、二四〇頁）。このような農業のブルジョア化こそが、農民的資本主義なのである。

「人民革命」・「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」は、プロレタリアートにとっては「最小限綱領」であって、「最大限綱領」は、いうまでもなく、「プロレタリアート独裁政権」の樹立、社会主義革命の遂行である。この「最小

限綱領」は専制、農奴制、君主制、特権の廃絶のための民主主義革命・民主共和国樹立のための綱領である。そして、プロレタリアートは民主主義革命から、ただちに、社会主義革命への「永続革命」（『全集』(9)、二四三頁）を遂行する。このさい、プロレタリアートは「完全な階級的独自性」（上同、三七頁）を保持して、社会主義革命の準備を行なうのである。

プロレタリアートは人民革命後、ブルジョア的発展の道をとびこえて、社会主義への道に移行することはできず、資本主義を土台にして、社会主義革命というプロレタリアートの根本的任務の実現に、もっとも都合のよい環境・舞台をつくりだそうとする（『全集』(9)、一〇六、三二三頁）。そして、プロレタリアートと農民が自分にとって、もっとも都合のよい土地変革が、「アメリカ型」の土地変革・農民的土地清掃であり、これに連続する農業進化の形態が、「アメリカ型」の農業進化・農民的資本主義である。

毛利健三氏は、前掲論稿において、ロシアの十月革命がブルジョア民主主義的課題を、副次的に果たしたことを論拠にして、「ブルジョア民主主義革命の徹底した課題解決はプロレタリア革命の一環としてしかありえなかった」（三九九頁）とか、「イギリス革命で『ブルジョア民主主義革命』の課題が徹底的に遂行されたことを意味しない。それはプロレタリア

革命のみのよくなしうるところである」(四二頁)、とのべているが、これはつぎの二点を理解していないことにもとづく誤謬である。第一点は、プロレタリアートのヘゲモニーのもとに、プロレタリアートと小ブルジョアの農民とが階級的に同盟して行なう人民革命は、それ自体としては、「資本主義的社會經濟体制の枠をこえない」(『全集』9)、三七頁)ブルジョア革命である、ということを理解していない点で。第二点は、ブルジョア民主主義革命の二つの形態、「共和主義的・革命的なブルジョア民主主義」と「君主主義的・自由主義的ブルジョア民主主義」(上同、四一頁)とを区別して理解していない点で。

注(1) このような土地国有化を可能ならしめたロシア的条件は、(イ)当時のロシア農民が土地所有者となつておらず、プロレタリアの「攻撃」をおそれない「急進ブルジョア」であつたこと、(ロ)ロシアの土地所有(地主的土地所有、農民的分与地所有)には、農奴制の残存物が最大限に残つていたことである(『全集』13、三二三頁)。

(2) 「……資本主義社會における土地固有の問題は、本質的に異なる二つの部分にわけられる。すなわち、差額地代の問題と絶対地代の問題とである。国有化は、前者の領有者をかえ、後者の存在そのものをく

つがえず。したがつて国有化は、一方では、資本主義の範囲内での部分的改良(剰余価値の一部の領有者の變動)であり、他方では、一般に資本主義の發展全体を妨げている独占の廢止である。」(『全集』13、二九九頁)。

(3) レーニンは、このことをつぎのようにのべている。

「……ブルジョア革命は、ある意味では、ブルジョアジーよりもプロレタリアートにとつて、より有利である。この命題は、まさにつぎのような意味で、すなわち、ブルジョアジーにとつてはプロレタリアートに対抗するために旧時代の残存物、たとえば君主制や常備軍などを支柱とすることが有利である、という意味で……。」(『全集』9、三九頁)。

(4) この点については、『全集』12、三三五頁参照。

(5) 「この独裁は、(革命的發展のいくたの中間的な諸段階を経ずには)資本主義の基礎に手に触れることはできないであろう。それは、いちばんうまくいったばあいには、農民の利益になるように土地財産を根本的に再分配し、共和制までをふくめて首尾一貫した完全な民主主義を実行し、農村生活からだけでなく工場生活からもいっさいのアジア的・債務奴隸的なものを根こそぎにし、労働者のいちじるしい改善と彼らの生活水準の向上との礎をおき……。」(『全集』9、四五)

四六頁)。

(6) 「二重権力」の特徴については、『全集』24、二二二―二三頁参照。

(7) 「実際、すべての私有地を没収するということは、数億にのぼる銀行資本を没収することを意味する。これらの土地の大部分は、銀行の抵当にはいつているからである。革命的階級が革命的方策によって資本家の反抗をうちくだかないでも、こういう方策を実行できるのであるか。このばあい問題になっているのは、もっとも集中された銀行資本であるが、この銀行資本は、広大な国の資本主義経済のもっとも重要な中心のすべてと無数の糸でむすびついており、それにおとらず集中された都市プロレタリアートの力だけがこれを打ちやぶることができるのである。」(『全集』25、三〇一頁)。なお、四二九―四三〇頁参照。

(8) この点については、『全集』24、二九七―二九八頁、25、一六六、一六七頁参照。

(9) なお、『全集』25、三三五頁参照。

四 資本主義の一般的危機段階における「二つの道」理論

理論 II 「二つの道」理論の現代的適用の問題

レーニンは人民革命後の農業発展の路線は、必ず資本主義の道を通らなければならない、といっているのであるが、果して

そうであるか。

第二次大戦後の東ヨーロッパにおける人民民主主義革命後の農業発展の路線、新民主主義革命後の中国農業の発展経路は、資本主義の進化的道を通過せず、農業集団化の道を進んだのである。つまり、人民民主主義革命後の小所有プラス自己労働の基礎のうえに立つ小農民経営は、大所有プラス他人労働を基礎とする資本制的経営に移行することなく、共同所有プラス共同労働という社会主義的経営に脱皮したのである。

レーニンは前述のように、「アメリカ型」の農民的土地清掃はロシア的条件のもとでは、土地の国有化なしには、その歴史的使命を果たしえない、と指摘し、十月社会主義革命によってこの土地国有化を実現したのである。しかし、プロレタリア革命の序曲としての人民民主主義革命は、すべての土地の国有化を行なわなかった。第二次大戦後の東ヨーロッパ、中国では「勤労農民的土地所有」(東欧)、「農民的土地所有」(中国)という形態で、農民の土地所有が容認された。レーニンも「農業問題についてのテーゼ原案」(一九二〇年六月)では、「プロレタリア権力は、大多数の国では、決してすぐに私的所有を廃止してはならない。ともかく、プロレタリア権力は、小農にも中農にも、彼らがその地所をそのまま持ちつづけることだけでなく、彼らが普通小作している分だけ全部その地所をふやす

(地代の廃止)ことを、保障するだろう。」(『全集』③、一四八頁)、とのべたこと。

土地私有の伝統が根づよく、農民の土地所有に対する渴望の強烈な国々では、すべての土地の国有化は困難である。しかし、これらの国においては、将来にわたっても土地の国有化が否定されているわけではない。土地国有化の全面的実現は、それぞれの国の歴史的・具体的条件によって、農業の社会主義的改造がすすむなかで、漸次的に実現されるものである。

では、中国革命の指導理論が、新民主主義革命後の段階において、資本主義の道への進化を、どのようなものとして把握していたかを以下検討する。

中国社会における商品経済の発生、浸潤は資本主義の萌芽をはぐくんできた。したがって、外国資本主義の侵入がなかったとしても、中国社会の資本主義的発展は、ゆっくりと行なわれたであろう。そこで、外国資本主義の中国への侵入は、この資本主義的発展を促進したといえることができる。中国におけるプロレタリアートの発生と発展は、中国ブルジョアジーの成長の外に、外国資本主義の経営する企業の発展にもなっても促進されたのである。かくして、中国のプロレタリアートは中国のブルジョアジーに比べて、社会的勢力として強力であり、その社会的基礎は強固なものであった、といえるであろう。(毛沢

東選集』第二巻、六二〇～六二二頁、中国文、以下『選集』(2)、六二〇～六二二頁と略記する)⁽²⁾

中国プロレタリアートの指導のもとでの、プロレタリアート、農民、都市小ブルジョアジーが同盟して行なう、反帝反封建の新民主主義革命の「……客観的要求は、資本主義の発展のための道をきよめることである。しかし、このような革命は、もはや古いもの、ブルジョアジーに指導されて、資本主義社会とブルジョア独裁の国家をうちたてることを目的とする革命ではなくて、新しいもの、プロレタリアートに指導されて、第一段階では新民主主義の社会を建設し、また各革命的諸階級の連合独裁の国家をうちたてることを目的とする革命である。したがって、このような革命はまた、まさに社会主義の発展のために、さらに大きな道をきよめるものである。」(『選集』(2)、六六一頁)。新民主主義革命を経済変革としてみるならば、一方では、資本主義の発展を圧迫していた障害物が除去されるので、資本主義経済のある程度の発展が行なわれるであろうし、他方では、外国資本主義と結託していた官僚資本は、国営企業に転化されるので、社会主義的ウクライドも発展するであろう。そして、大銀行、大工業、大商業の国有を基軸とする社会主義的国営経済が、「全国民経済を指導する力」(『選集』(2)、六七頁)となり、私的資本主義経済は、「国民の生計を左右しえない範囲

において、発展の便宜があたえられる」（『選集』(3)、一〇八四頁）のである。新民主主義革命を政治変革としてみるならば、国家形態は「新民主主義共和国」（『選集』(2)、六六一頁）、「人民民主独裁の国家」（同上(4)、一四七六頁）であり、「政權組織」としての「民主集中制」は「民主主義的基礎のうえにおける集中、集中的指導のもとにおける民主主義」（同上(3)、一〇八〇頁）である。この人民民主独裁は労働者階級、農民階級、都市小ブルジョア階級の同盟を基礎とするものであるが（これらの階級に民族ブルジョア階級を加えたものが、「人民」と総称されるものである）、その実質は、プロレタリアートの指導する労働同盟を基礎とするものである。

この人民民主主義革命は「農民の解放を主要な内容とする」（『選集』(3)、一〇八三頁）ものであるが、これは、半封建的地主的土地所有を根絶して農民的土地所有を創出することである。そして、この農民的土地所有制は非資本主義的進化的道・農業協同化の道を通じて、集団的所有制へ移行する。

以上のように中国の新民主主義革命後の中国経済の発展経路は、必ず資本主義の道を通らなければならない、とは規定されていない。つまり、国民の生計を左右しえないような資本主義的生産は、あくまでも利用する、という立場をとっていたのであるが、管制高地は社会主義的ウクライドが占領し、この

ウクライドの強化・拡大こそが、新民主主義革命後の路線であったのである。⁽⁴⁾

以上のことを、資本主義の一般的危機という世界史的段階における「二つの道」理論として要約すると、つぎのようにいえるであろう。

プロレタリアートのヘゲモニーのもとでの人民民主主義革命・新民主主義革命によって創出された農民的土地所有・小農民経営は、一般的には、資本主義的進化的道を通過せず、農業集約化の過程をたどる。資本主義の一般的危機という世界史的段階において、小農・小生産の所有者の側面の前途袋小路の状態のもとで、プロレタリア革命の序幕としての人民民主主義革命による土地変革によって創出された小農民経営は、レーニンのような農業ブルジョア化の「アメリカ型」の道をたどるのではなく、協同化による農業の社会主義的改造の道を進むのである。しかし、ここで重要なことは、人民民主主義革命は、あくまでも、耕作農民の立場に立って、半封建的地主的土地所有を廃絶し、現代的な農民的土地所有を生みだすが故に、その限りでは、耕作農民の立場に立って、農民的土地清掃を行なう、「アメリカ型」の土地変革と共通する側面を有するのである。つまり、土地変革の側面では、「アメリカ型」の土地変革が適用できるのである。しかし、他方では、この農民的土地変革後

の農業進化の形態は、歴史的發展段階による制約を受けること
によって、ブルジョアの進化の道をとらず、農業集団化の路線
を進むのである。つまり、土地変革後における農業進化の側面
では、「アメリカ型」の農業進化という規定は適用できないの
である。ここに、資本主義の一般的危機という世界的段階に
おいて、階級配置論（これを規定するものは現実的な経済過程
である）、歴史的發展段階論を媒介として、「二つの道」理論を
適用する場合の、普遍性と限界性とは存在するのである。

堀江英一氏は、『産業資本主義の構造理論』（昭和三五年）
で、「アメリカ型」の道を「それは、『地主的な土地所有の廃
止』の道であり、『小農民経営が先頭に立って、革命的な手
段によって社会という有機体から農奴制的巨大土地所有とい
うへこぶVをとりのぞき、そのあとで、巨大土地所有なしに、
資本主義的農業経営制度の道を自由に発展する』（『全集』⁽³⁾、
二三四—二三五頁）方法である。これは家父長的農民がブル
ジョアの農業企業者へ転化する道である……。」（一九一頁）
とレーニンからの引用で規定され、「フランス大革命におけ
る封建的土地所有の撤廃、さらに中国大革命の封建的土地所
有の撤廃などはアメリカ型の道である……。」（同上、一九五
頁）といわれているが、中国革命の場合の封建的土地所有の廢
棄は、前述のような「二つの道」理論の段階論の規定からす

るならば、「アメリカ型」の土地変革であった、というべき
であって、堀江氏のように「アメリカ型の道」（土地変革の
「アメリカ型」と農業進化の「アメリカ型」とを含む全過程）
であった、ということとはできない。

注(1) 土地国有実現の条件については、『全集』⁽³⁾、三
二〇—三二四頁、高杉次郎「農業改革と土地国有化
問題」、九二—一〇三頁（『経済評論』昭和二八年
一月号）、拙稿「農民的分割地所有の存在形態と
歴史的特質」、二四〇—二四一頁（『農業総合研究』
第一三卷一号、昭和三四年）、前稿上原論稿、三一三
—三一八頁参照。

(2) 中国に侵入した外国資本主義が、中国の封建的勢
力と結託して、資本主義の發展を圧迫した側面につ
いては、『毛沢東選集』第二卷、六二一—六二四頁參
照。

(3) 中国農業の社会主義的改造については、簡単なも
のではあるが、前掲拙稿、二三七—二四三頁参照。
なお東欧諸国における土地改革と農業の社会主義的
改造については、宇高基輔「東欧諸国における土地
改革と農業の再編成」、三—一五六頁（東京大学社
会科学研究所『社会科学研究』第七卷、二・三・四
合併号、昭和三十一年三月）参照。

(4) 「新民主主義の政治、経済、文化は、それらかすべてプロレタリアートに指導されるために、いすれも、社会主義的要素をもっている。そして、それは普通の要素ではなく、決定的な役割を果たす要素である。」(『選集』(2)、六九八頁)。

——一九六四・九・一七——